

4  
章

幼児期からの漢字学習こそ二十一世紀の教育  
幼児教育、小学校教育、障害児教育、そして国際文字へ

## 漢字こそ子どもに新しい可能性を開く

## ● 小学校教育からの出発

1章でも触れましたが、私の漢字教育の実践は、まず小学校教育からスタートしています。石井式漢字教育というものをより深く理解していただくために、小学校教育から幼児教育へと至った経緯について、駆け足でご紹介しておきたいと思えます。

少々古い話になりますが、昭和二十六年、高校、中学の教員を経て、当時東京部八王子市教育委員会の指導主事を務めていた私は、全国国語教育評議会の小学校部会で、「学校」という言葉を、社会には実在しない「がっこう」という表記ではなく、はじめから「学校」という漢字で教えたほうがよいのではないか」という意見を発表しました。

もっとも、このときは「子どもにとって、漢字がかなよりやさしい」という事実を私白

身まだ理解していませんでした。「がっこう」という表記で覚えても、これでは、せっかく学んだものが社会で用をなさないうえ、読み書き能力も育たない」と考えてのことでした。

ところが、こうした私の意見は、文部省の基本方針を批判するものと受け取られ、ほとんど黙殺される格好となりました。そこで私は「この際、自分の考えを自ら実践して、確かめてみよう」と考え、新たに小学校教員免許を取って小学校の教師となりました。最初には赴任したのは、残念ながらすでに廃校となった新宿区立淀橋第一小学校です。そして、その後は同じ新宿区立の四谷第七小学校で教鞭を取るようになりました。

実際に一年生を担当して、はじめから“山”“川”“字校”と漢字で教えてみますと、子どもたちはたちどころに覚えてしまいます。そればかりか、文章もかな書きより

も漢字かな交じり文のほうが、ずっとすらすら読むではありませんか。漢字は難しいどころか、かなよりずっとやさしいということが、このとき、はじめてわかったのです。

当初、私は一年間で三〇〇字くらいを目標にしましたが、子どもたちは面白いように漢字を覚え、一年生でもほとんどの子どもが五〇〇字くらいは楽に読めるようになることがわかりました。

そして、これだけの「漢字力」が身につくと、五年生程度の本をいきなり与えても臆することがありません。読めない漢字が出てきても、読解力があるので「当たらずと言えども遠からず」の読み方で、どんどん読み進んでいけるのです。

さらに、現場での経験を重ねていく中で、漢字を丸暗記する力は一年生のおときが最高で、学年が進むにつれて低下するものであることを発見しました。一方、暗記より理屈で考えることが得意になる高学年の漢字教育では、部首など漢字の成り立ち

から意味を教える解字指導が不可欠であることを発見し、漢字漢文の全国大会にクラスの小児童全員を出席させて公開授業を行い、小学生でも解字指導によって未知の漢字が解読できることを参会者たちに披露したりもしました。

この間に、私を支持してくれていた校長が退職し、後任に石井式に批判的な新校長がやってきたという事情もあって、担任した新一年生を二年間、文部省指導要領に従って教えたことがありました。ところが、これは両者を比較する絶好の機会となり、そのおかげで石井式がどれほどすぐれた教育法であるかを、改めて確認することができました。

そして昭和三十六年、私は、その二年間の文部省式教育と、それに先立つ三年間にわたる石井式教育との結果を比較したものを、さらにその結果により確信を得た新石井式教育の一年間の成果をまとめた『私の漢字教室——石井学級の実験報告』を上梓じょうし

したのです。

### ●小学校での実践の限界

『私の漢字教室』の出版により、石井式漢字教育は全国に知れわたることになりました。ところが、文部省の指導要領を無視した教育ということで、実際に「やってみよう」という教師はほとんど現れませんでした。

その中で新潟県亀山町の袋津小学校、続いて熱海市の桃山小学校、富上市の須津小学校、少したって弘前市の船沢小学校が、全校挙げて実践してくれました。しかし、その著しい成果にもかかわらず、実践の中心であった校長が変わると方針は変更され、いずれも五年間くらいの実践で、根付かぬまま終わってしまいました。

唯一の例外は、島根県における実践でした。昭和五十一年度、斐川町の出東小学

校ではじめられた石井式は、稲田和夫校長を中心に全校挙げて実践され、まず五十六年度まで五年間続けられました。そして、五十七年度には校長以下全職員がすっかり入れ換わり、初期の職員はひとりもいなくなりましたが、研究、実践は中間幸夫校長以下全職員に引き継がれていよいよ充実していったのです。

また、昭和五十九年度には、元校長の稲田先生を会長とし『石井勲先生を囲む会』が結成され、この会の主催で毎年夏休み中に、石井式教育研究会が開催されるようになり、すでに一六回に及んでいます。受講者の数は延べに数千人に及ぶでしょう。

しかし、これは本当にまれなケースです。特に悲惨だったのが、私の考えに共感してくれた教師が個人で実践を試みた場合です。クラスでの成果が上がれば上がるほど、周囲からの風当たりが強くなり、中止せざるを得なくなります。そればかりか、と

きには精神的ストレスから体をこわしたり、退職を余儀なくされるといった、痛ましい結果さえ招きました。

そういう悲劇を見続けているうちに、私は「小学校の教育現場では、石井式はとても普及できない。もう著述で訴えていくしかない」と考えるようになりました。同時に、志の高い立派な教師をこれ以上不幸な目に遭わせるのも耐えがたいことでした。

そこで、私は十四年間やってきた小学校教育の現場から身を引く決意をしたのです。昭和四十二年三月、私が四七歳のときでした。

### ●小学校から幼児教育へ

その年の暮れに近いある日のこと、大阪の小路幼稚園の井上文克園長が来訪されました。「『一年生でも新聞が読める』昭和三十八年、講談社刊)を読んで感動した。

幼稚園児もやれるのではないか」と言うのです。

これまでの小学生の指導で、一年生は六年生配当漢字の三倍もの漢字が読めることを身をもって知っていた私には、「幼稚園でも年長児なら五、六年生以上に漢字が読めるに違いない」という確信めいたものがありました。それで、年が明けて幼稚園がはじまると、すぐに大阪に出かけたのです。

幼児を指導するのはこれが最初です。それでも、自信をもって昔話をしながら、話の中に出てくるキーワードを黒板に、何の説明もせず書き付けていきました。その後、その言葉を口にするときには、さり気なく書き付けられた漢字に手を触れます。

こうして話し終えてから、黒板に書き付けられた十数字の漢字の一つを指して、「この字を読んでみよう。ハイッ」と言うと、幼児たちが何のためらいもなく一斉に読んだのには、正直私も驚きました。

年長児の漢字適応力は決して一年生に劣らないことが、このとき、はっきりとわかったのです。「これなら、年中児にもできるに違いない」と、すぐに年中児にも同じ様にやってみました。すると、年中児も年長児に負けず劣らず、しっかりと漢字を読みまします。そして、ついには、年少児にも漢字教育は少しも抵抗なくはじめられることがわかったのです。

井上園長は、このことを仲間の園長さんたちに話し、漢字教育をすすめてくれました。そこで、その頃毎週月曜日に大学の講師を勤めていた私は、大学の講義を終えると、その日のうちに大阪へ行き、毎日、井上園長の案内で幼稚園を訪れ、その園長さんに漢字教育を実践して見せる、という生活がはじまりました。

このおかげで、四月の新学期から小路幼稚園、文化幼稚園、旭学園幼稚園など、大阪の有力な幼稚園数園で、そろって漢字教育がスタートすることになったのです。

ところが、このことがマスコミで大きく取り上げられますと、たちまち、あちこちからたいへんな非難が巻き起こりました。「かなを教えるのも早すぎるというのに、漢字を教えるとは何という暴挙か」と言う訳です。

ところがこのとき、わが国屈指の国語学者であり、大ベストセラーとなった『日本語練習帳』の著者としても知られる大野晋先生が、『週刊朝日』の依頼を受けて、大阪の実践幼稚園を視察し、『漢字で教育する幼稚園 大阪市での新しい試みをみて』という表題で、

「『漢字で教育』という方式——これはご存知の石井勲氏の方式の拡張なのだが——、これがどんな成果をこれからあげるか。固定観念の打破によって前進があるとすれば、この新教育は注目に値する試みである」

## 「漢字で教育」する幼稚園 大阪市での新しい試みをみて

学習院大学名誉教授 大野 晋氏

漢字かな交じり文が、日本語の標準的な表記法であることは誰しも認めるところだ。してみれば漢字の学習法に、何か新しい方法は無いものか。漢字教育を根本的に考え直して生徒に対するなら、もっと効率のいい教育が行われるのではないか。

社会科とか理科とかと、小学校一年から分けて教育をしているが、二年になり、二年になつても、教科書も読めないために、社会科も理科も自分の科としての勉強ができずに、教科書の読み方に時間を使っている所は非常に多い。それでは、時間がもったいなさすぎる。

幼稚園への入園率は年々増加の一途をたどっている。この新鮮な時期に、基本的な漢字の読み方を覚えてしまふなら、こんな便利なことはないだろう。少なくとも見積もつても、幼稚園で平均四〇〇字くらい読めるようにすることは可能らしい。

「漢字で教育」という方式——これはご存知の石井勲氏の方式の拡張なのだが——、これがどんな成果をこれからあげるか。

固定観念の打破によって前進があるとすれば、この新教育は注目し値する試みである。

〔週刊朝日〕・昭和四十三年七月十二日号より）

という趣旨の一文を発表しました(前頁参照)。

これによって実践者たちは大いに力づけられ、実践園も次第に増えていったのです。

## ● 幼児教育の変革を目指して

もう一つ、幼児教育における石井式の普及を後押しする、こんな出来事がありました。

世界的な月刊誌、リーダーズ・ダイジェスト社の方が、その頃アメリカで流行していた学習機器を携えて「何か、うまい使い道はないものか」と相談に見えたのです。その学習機器とは、発声テープを付けたカードを機器に通すと、機器がそのカードに書かれた単語などを読んでくれるというもので、見た瞬間、「これは行ける」と思いまし

た。

「記憶の原理は“関心”と“反復”の二つです。とりわけ学習に大切な“反復”は、幼児は大好きなのに、教える側の教師や親にとっては大の苦手です。ところが、これを使えば、くり返しが大好きな幼児のこと、飽きることもなく反復して、ひとりで漢字を覚えてしまうに違いない、と考えたのです。

この機器は、訪問販売という形で発売され、大好評を博しました。北は北海道から南は沖縄まで、各地で普及のための講演会が開催され、私は東奔西走することになりましたが、会場の多くが幼稚園であったため、実践幼稚園、保育園が急速に増えていったのです。

とはいえ、「幼児を預かって、ただ遊ばせておけばよい」という園も多い中で、あえて漢字教育をやってみようと決断するのには、かなりの勇気が要るようです。

現在、熱心に石井式を実践しているほとんどの園も、決してすんなりと漢字教育への取り組みがはしまったわけではありません。

ある年配の園長さんは、何回も私の講演を聴き、私の著書を何度もくり返して読んでさうです。しかし「信じられないというよりも信じなくなかった」と言います。この教育が正しいとすれば、今まで自分がやってきた数十年が空しかったことになるからです。

それでも、悩みに悩んだ末、ついに実践幼稚園を見学してみて「子どもたちのために一日も早くこの教育を採用しなければ」と、その場で決心されたさうです。

また、別のある園長さんは、「こう言っています。「最初、先生方は皆強硬に反対したが、私は半ば強制的にやってもらった。すると彼女たちの予想に反して子どもたちが漢字をどんどん覚え、まず子どもたちの態度が変わる。教師の指示に注意深く反応す

る。理解が早い。だから、それまで消極的だった指導が、子どもの反応のよさに引かれて積極的にになり、先生方の顔色も変わってくるのです」と。

ひと頃、流行語にもなった「赤信号、みんなで渡れば怖くない」という言葉は、日本人の特性をひじょうによく表した言葉だと思えますが、これは裏を返せば「青信号でも、ひとりで渡るのは怖い」ということに他なりません。どれほど子どもにとって有益な教育であるかがわかっていても、周囲の園を見回して、やっていなければホッと胸を撫なで下ろす、という園のほうがまだまだ多数派なのです。

現在、石井式を実践している幼稚園、保育園がおよそ七〇〇園ほどにのぼりますが、これも全体からすれば、一〇〇園のうち一園か二園かという程度にすぎません。「多くの子どもたちが、かけがえのない幼児期を無為に過ごしている」と思うと、いたたまれない気持ちがありますが、教育関係者やお母さん方の中に、ひとりまたひとりと、

石井式漢字教育の理解者を増やしていくことで、いつしか時代も大きく変わっていくはずです。私は、その日の来ることを期して、これからも人々に呼び掛けていこうと思っています。

### 障害児教育にも大きな期待が

#### ● 医者から見放された障害児が半年で一五〇の漢字を覚えた！

1章でもご紹介したドーマン博士の幼児能力開発は、障害児教育からはじまったといます。脳障害があっても十分に成果を得られる教育法だから、健常児にも必ず役立つはずである、という発想です。私の場合も、いくぶん似たところがあるかもしれま

せん。

私が、四歳半になる脳障害の女の子について、はじめて相談を受けたのは小学校の教職を退いて数年後のことです。一歳半のとき、交通事故により頭蓋骨陥没ずがいこつという瀕死ひんしの重傷を負い、脳に障害の残った彼女は、あらゆる施設や病院で回復不可能だと宣告されたといえます。ご両親は、せめてかなで書かれた自分の名前だけは読めるようにしようと、まず「い」から教えはじめましたが、毎日の努力にもかかわらず、一年たっても読めるようにならない、ということでした。

このとき、私の頭にすぐに思い浮かんだのが、小学校の教員時代のこんな体験でした。一年生に「青い空、白い雲」と教えますと、どの子もすぐに覚えて正しく読めるようになります。「青」「白」「空」「雲」の漢字も一字ずつ示せば、どの子も正しく読みます。

ところが、ひらがなの「い」だけだと、いくらやっても読めない子が何人もいるのです。それで、そういう子どもたちだけあとに残して、特別に「かな」の指導をしました。その日は覚えたように思えても、翌日にはもう読めなくなっています。

十四年間にわたる体験で、もっとも覚えの悪い子は、一年の三学期を終えるまで、ついに一文字もかなが読めるようになりませんでした。ところが、漢字は容易に覚え、そして忘れません。それが1章でもご紹介したY君です。

そこで私は、「ひらがながまったく読めない脳障害児でも、漢字なら覚えられるのではないか」と直観し、ご両親に「毎日、一日に一五回、一枚の漢字カードを十秒ほど見せて読ませる」という方法を試してみるようにアドバイスしました。

やり方は、次の日に、そのカードを見せ、読めたら新しい漢字カードを一枚ずつ増やしていく。そして、八枚目のカードが加わる時には、最初に読んだカードを取り

下げ、以後、おさらいするカードが六枚と新しいカードが一枚というパターンをくり返す、という健常児の場合とまったく同じ方法です。

それから十日ほどして、ご両親から速達が届きました。そこには「一年たってもかなが一文字も覚えられなかった子が、この一週間に七つの漢字を覚えて読めるようになりました。どの漢字も正しく読めます。これまでは悲嘆のどん底にあったが、これで希望がもてます」という溢れんばかりの喜びが綴られていたのです。

そのおよそ半年後、私はこの女の子と再会しましたが、はじめて会ったときの、どんよりとした暗い表情が一変し、目は生きいきと輝き、見違えるほど明るい表情になっていました。そして、覚えて読めるようになった漢字も、すでに一五〇字ほどにも達していました。

これは、その後、多くの脳障害児と関わっているうちにわかったことですが、漢字がこの程度読めるようになりますと、どんな子どもでも、態度や表情が目に見えて変わってくるものなのです。

### ●現行の障害児教育の誤り

こうした経験を重ねる中で、私は「どんなにひどい脳障害児でも、漢字が覚えられない子どもはいない」ということ、そして、また「漢字を覚えるにつれて、頭の働きは確実によくなる」ということを確信するようになりました。

生まれつき脚の丈夫な人でも、脚を使わないでいると脚が弱くなります。その反対に、どんな脚の弱い人でも、脚を頻繁に使っていれば必ず強くなっていきます。頭も脚と同じことで、使わないでいると弱くなり、頭をよく使うようにすれば、どんなにひどい脳障害児でも頭の働きがよくなるというのが道理です。ただ、そこには、脚の弱い

人が歩くのに最初は杖が必要なように、脳を働かせるためには漢字という適切な道具が必要なのです。

ところが、今の障害児教育では、漢字は難しすぎると考えられていますので、逆に覚えにくいかな、ばかり教えています。だからなかなか覚えられず、また覚えたところで、かなには意味がなく、生きいきとしたイメージが湧きません。そのため、かなを学んでも頭が働かず、したがって脳の働きがいつこうによくならないのです。これに反して、漢字は具体的な意味をもっていて、生きいきとしたイメージを頭の中に湧き起こさせますので、自然と頭が働き、脳の働きがよくなっていくのです。

私の研究所の教室には、言葉が覚えられない脳障害児のクラスがありました。ここで、漢字は素晴らしい効果を発揮しました。

たとえば、時計を見せながら「これはトケイだよ。トケイ、トケイ……」とくり返して言います。そしてすぐに、漢字カードを示して「これはトケイという字だよ。トケイ、トケイ、……」と、これもくり返して言います。子どもが興味を示しそうな品物とそこの漢字カードをたくさん用意しておき、これを順番にやっていくのです。

教室は一週間に二日、それも十時から十二時までの二時間だけですが、そのうちこの学習を十分くらいします。これだけの学習で「時計」という漢字カードを示すと、実物の「時計」を指で示すようになるのです。そして、「よくわかったね」と誉めてあげますと、子どもはいかにも嬉しそうになります。

言葉を口に出せない子どもでも、漢字がそれぞれに意味をもっていることがわかり、漢字カードと実物とを正しく結びつける作業は、とても楽しいものようです。だから、この作業をするときの子どもの目は輝いています。

漢字カードに書かれた物を指せるようになったからといって、すぐに発語に結びつく

わけではありませんが、これを続けていますと、いつともなく自然に子どもの口から言葉が出てくるようになるのです。

●漢字は言葉そのものより覚えやすい

すでにお話ししましたように、音声としての言葉というのは意外に覚えにくいものです。「ロ」という簡単な言葉でも「く」「ち」という二つの音で構成されています。「くち」という二つの音が続け様に出てきますから、どんなに注意して聞こうとしても、その言葉のわからない子どもにはとても受け止められません。知らない外国語の発音を二度や三度聞いても覚えられないのと同じです。それに、音声はいきなり見せられ、発せられるや否や消滅してしまいますから、瞬間的に捉えなければなりません。

そこへいくと漢字は、目を開けていさえすれば視覚から入って来て、脳が必ずこれを受け止めてくれます。「これは「くち」だよ」と言うだけでは脳は言葉として受け取れなくとも、「ロ」という漢字だったら目に入って必ず脳に記録されるのです。

つまり、漢字というのは、言葉そのものよりずっと覚えやすいものだと言ってもいいでしょう。

この七十年間、多くの学者たちがチンパンジーの子に言葉を教えようと、熱心な実験を試みましたが、皆失敗しました。それで私は、「チンパンジーには言葉そのものを覚える能力はないだろう。だが、漢字を教えたなら覚えるに違いない」と、この二十年間、言い続けてきたのですが、とうとう、京大の松沢教授がチンパンジーに漢字を教えて覚えさせることに成功しました。これによって、「漢字は言葉そのものより覚えやすい」という私の説が動物レベルでも見事に証明されたことになりました。

■「石井式・幼児からの漢字教育」これまでの歩み

- 六一・〇三 朝日新聞紙上で、石井勲の四谷七小での漢字教育の実践が紹介され、それ以降、これをめぐる議論が活発に
- 六一・〇七 石井勲著『私の漢字教室』が刊行される
- 六五・〇三 第七期国語審議会第五回総会において、吉田富三委員が「石井氏の主張について専門的な調査研究をするよう」提案
- 六六・〇二 毎日新聞学芸欄に「独自の国語指導法」石井方式“をみる”と題して取り上げられる
- 六八・〇二 読売新聞紙上にて東京大学教授の宇野精一氏が「石井方式を採用せよ」と訴える
- 六八・〇七 読売新聞が「幼稚園で漢字論争」と題して取り上げる
- 六八・〇七 週間朝日誌上にて大野晋氏が『漢字で教育』する幼稚園大阪市での新しい試みをみて」と題して調査報告の記事
- 六八・〇九 朝日ジャーナル誌上で「こは、幼児に対する漢字保育／幼稚園長研究会から」と題して取り上げられる
- 六八・一〇 朝日新聞主催の講演会で石井勲が「漢字は才能を開発する」と題して講演
- 六九・〇八 大阪の幼稚園八園が石井式漢字教育をはじめ
- 七〇・〇四 大東文化大学幼少教育研究所が設立され石井勲が所長に
- 七二・〇六 アメリカ人間能力開発研究所所長グレン・ドーマン博士来日、石井勲との共同研究が企画される
- 七三・〇四 石井教育研究所設立 石井勲が所長に
- 七七・一〇 石井勲著『石井式漢字教育革命』が刊行される

- 八一・〇一 朝日新聞の論壇において「漢字の効果的な教え方」として取り上げられる
- 八一・〇四 朝日新聞(教育のひろば)紙上で「漢字教育」幼児期こそ効果“東京・青桐幼稚園の石井方式”と題して取り上げられる
- 八一・〇九 朝日新聞の社説「漢字教育を根本から直せ」で石井式漢字教育のことが取り上げられる
- 八三・一〇 『石井勲の漢字教室 全九巻』が刊行される
- 八六・〇四 月曜評論に石井勲が「石井勲脳障害者治療に効果的な漢字教育」と題して投稿
- 八七・〇四 「石井方式・幼児からの漢字教育」二十周年を迎える
- 八八・〇七 新学習指導要領における漢字配当表で小学校で学ぶ漢字が一〇〇〇字を越す
- 八九・〇三 石井勲が「幼児教育に画期的な石井式漢字教育の指導法を樹立したことが評価されて第三七回菊池寛賞を受賞
- 九〇・〇五 「第一回全国漢字かるた大会」が開催される
- 九四・〇三 日本漢字教育振興協編『石井式漢字教育二十五年の歩み』が刊行される
- 九四・〇四 国立国語研究所「常用漢字の習得と指導 付・分類学習漢字表」(東京書籍)で指導法として特に「石井方式・幼児の漢字教育」が取り上げられる
- 九四・一〇 「第一回国際漢字学会」(ソウルにて)が開催され、幼児に対する漢字教育で目覚ましい成果をあげている国際的に著名な学者として石井勲が主催者より招請を受ける
- 九七・〇四 石井勲著『〇歳から始める 脳内開発』が刊行される
- 九八・一一 「石井方式・幼児からの漢字教育三十五周年記念講演会」が開催される
- 〇三・一一 「石井方式・幼児からの漢字教育三十五周年記念講演会」が開催される 基調講演・藤原正彦氏。

今、ふたたび静かな漢字ブームが……

●漢字の生きいきとした表現力が見直されはじめた！

平成八年一月五日、NHKテレビ特別番組として『ミラクル漢字ワールド』が放映されました。この番組には私も参加しましたが、この頃、カタカナに替わって漢字が使われる傾向が目立ってきたが、それはどうやら漢字がもつ不思議な魅力のせいらしい」という趣旨のものでした。

たとえば、商品名にもビールを“麦酒”と書いたものが現れたり、“黒(生)”“辛口”という表記が使われているばかりでなく、“淡麗(端麗ではない)”“豊醇(豊潤でもなく、芳醇でもない)”という新造語までが出現しています。

“グロ(ナマ)”と“黒(生)”、“カラクチ”と“辛口”。比べてみればその違いがよくわかりますが、漢字は、カナやローマ字と違って一つひとつの文字が生きいきとした特有の意味をもっていて、見る人の目にそれを一瞬のうちに語りかけてきます。

これに対し、カタカナ、とりわけ外国語をカナ書したものは読みにくく、また読んでみても意味のはっきりしないものが多いのです。

これまで、その曖昧な表現あいまいが多く日本人に好まれる傾向にあったようですが、こへきて、ひと目見ただけで強い印象を与えることを要求される商品名などに、漢字が多用されるようになったというのは、単なる懐古趣味ではなく、漢字一字一字がもつ豊かな表現力が見直されはじめた、ということでしょう。

また、ちょっと意外かもしれませんが、現在、世界中の文字の中で、もっとも有効な表記法と言われているのは、実は漢字かな交じり文なのです。

このことは、一九六〇年代に、世界的な言語学者ノーム・チョムスキーがすでに予想

しておりましたが、その二十年後、アメリカのMIT（マサチューセツ工科大学）の実験により、見事にこれが証明されました。そして、他界中を驚かせた、明治期や戦後における日本の経済発展の原動力の根底には、世界一速く正しく情報が吸収できる“漢字かな交じり文”があった、という指摘もなされているのです。

漢字のよさが見直されはじめていたとはいえ、日本人の中には、まだまだ横文字やカタカ言葉ありがたを有難がる傾向が強いものです。ところが、情報化時代と言われる今だからこそ、逆に、世界に誇れる“漢字かな交じり文”というすぐれた表記法をもっともっと大切にしてもいいのではないのでしょうか。

### ●漢字ブームに拍車をかける漢字検定

日本語ワープロの普及により、これまで「書くのに手間がかかる」「忘れた字をいち

ち辞書で調べるのが面倒」といった理由から敬遠されがちだった漢字が、キー操作一つで、簡単に変換され、印字できるようになりました。こうした時代背景も「書けなくても読める字、知っている言葉であれば、積極的に漢字を使おう」という傾向を後押しする要因になっていると思われれます。

ただし、漢字というのは同音異字がとて多いため、いくら自分で書く必要がないとはいえ、ある程度の“漢字力”がないと、どんなに優秀なワープロ機やワープロソフトを使っても正しく変換することができません。そのため最近、大人の間にも、改めて漢字を学習しようという人が増えてきました。

これに拍車をかけたのが“漢字検定”です。漢字検定とは、財団法人日本漢字能力検定協会が文部省の認定を得て試験を行い、能力に応じ級位を授与するものですが、その応募者は年々増加の一途をたどり、最近一年間の受験者の数は一三〇万人を超

えた、と伝えられています。一三〇万人と言いますと、単純に計算すれば日本人の一〇〇人にひとり、ということですから、これはたいへんな数です。

そして、この“漢検”の級位は、かつての“英検”と同様、あるいはそれ以上に、個人の能力を証明する資格として社会的にも認知されるようになり、現在では入社試験はもちろん、大学入試にも級位が影響を及ぼすほどになっているのです。

漢字の重要性を考えたら当然のこととはいえ、こうした漢字ブームが起きているのは、私としても嬉しい限りです。

### 漢字こそ二十一世紀の国際文字

#### ●漢字は国際文字になれる

“国際文字”と言えば、大抵の人が頭に浮かべるのはローマ字だと思います。確かに、

英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語など、ヨーロッパを発祥の地とする言語は、すべてローマ字を使って表記されますし、それ以外の言語、たとえば日本語や中国語もローマ字で表記することは可能です。

ところが、それは単に音声として表記が可能だということであって、ローマ字で書かれた日本語は、日本語がわかる人には理解できますが、日本語がわからない人にはさっぱり理解できません。同様に、ローマ字で書かれた中国語は、中国語がわかる人には理解できますが、中国語がわからない人にはまったく理解できません。つまり、国際文字というものも「世界中の誰もが読んで理解できる文字」であるとするなら、ローマ字は国際文字としてはまったく用をなさないのです。

現時点で、国際文字と呼べるものは「1、2、3……」といったアラビア数字だけでしよう。アラビア数字は、ローマ字のような表音文字ではなくて表意文字です。だから、

日本人はこれを日本語で読み、英米人はこれを英語で読み、中国人はこれを中国語で読むというように、世界中の人が皆、自分の国の言葉でこれを読むことができ、世界中の誰が書いた数字でも、正しく理解できるのです。

では、アラビア数字と同じ表意文字である漢字は、どうでしょうか。もともと漢字は、中国語を表すために作られた文字です。しかし、私たち日本人は、これを日本語を表す文字として使っており、“山”という字を見れば日本語で“ヤマ”と読みます。ということは、日本人が漢字を日本語で読むことができるように、世界中の人が皆、漢字を自分の国の言葉で読むことが可能だということです。たとえば、英米人は“山”を“マウンテン”と読めばよく、フランス人はモンとフランス語で読めばよいのです。

このような理由から私は、漢字こそが国際文字としての資格をもつ文字であると考えています。

ドーマン博士にも「アメリカの子どもでも、マウンテンという英語を mountain という綴りで学習するよりも“山”という漢字で学習したほうがやさしい」と述べており、実際の学習効果も確かめられています。

### ●漢字は日本人より英米人のほうが学びやすい?!

「でも、アメリカ人やイギリス人が漢字をすべて英語で読むなんて、いくらなんでも無理な話では？」と考える人も多いと思います。ところが実は言うと、日本語ほど漢字で表すのが難しい言語はなく、それに比べれば、英米人が漢字を英語で読むほうが、ずっとやさしいのです。どういうことか詳しく説明してみましよう。

私たち日本人は“足”も“脚”も“あし”と読みますから、両者の違いを知らない人も多いのですが、英語では“足”は foot、“脚”は leg と、最初から別々の言葉があります。

ですから、ふつうの日本人が正しく理解できない“足”と“脚”の違い(足は膝から下の部分、脚はあし全体のこと)も、英米人だったらすぐに理解し正しく使い分けることができます。

同様に、“みる”と読む漢字に“見、看、視、観”がありますが、やはりその違いを知らない人が多いと思います。しかし、英語には look、see、watch、observe など、それぞれの漢字に当たる言葉がきちんと存在していますから、“見”は 見、 “看”は 看 というように、漢字と英単語を一对一で対応させて学ぶことができるのです。

また、私が中学で最初に学んだ英語は、This is an ox でした。「これは一頭の牛です」と訳しましたが、めうし 〆は漢字の“牯”かうに当たり、「去勢された雄の牛」のことを言います。英語には、漢字の“牛”、つまり日本語の“うし”に当たる言葉はありません。あるのは めうし (牝)と めうし (牡)と ox、oxen(oxの複数形)です。

このように、英語には(独、仏語なども)日本語にない言葉が沢山ありますが、漢字は世界一豊かに言葉を備えていますので、どんな国の言葉でも、大抵、漢字で表現できます。

また、漢字の本家である中国語の文法は、日本語よりも欧米語の性格にずっと近いものです。ですから、もし欧米人が漢字を使うようになれば、私たち日本人が戻ったり飛び越したりしながら読む漢文も、そのまま意味を理解したり、あるいは英語の文章を漢文とほぼ同じ形で表現することすら可能なのです。

### ●漢字の国際化で世界は変わる

世界でいちばん漢字が学習しにくいはずの日本人が立派に漢字を使いこなしているのですから、漢字が使いこなせないという民族は、世界中に存在しない、と私は確信し

ています。

そこで、そのことを証明するためにも、ぜひ挑戦してみたいと思っていることがあります。それは、ほとんどの国民が文盲というような文化的にも未発達な国で、私の考へに共鳴してくれる若者に集まってもらい、その国の幼児たちに漢字教育を実践することです。もちろん、漢字は、その民族の言葉で読んでもらうのです。そうすれば、幼児たちは必ず漢字を理解し、自分たちの使っている言葉でそれが読めるようになるはずです。

また、そればかりでなく、日本人の子どもが漢字で日本語を学ぶことによって知能が伸びていくように、彼らの頭脳もまた、どんどん発達していくはずですよ。

実際、“鳩”、“鶴”といった言葉を英語の表記 pigeon, crane で学習した英米人の子どもたちは、まだ習っていない hawk, eagle といった単語を見せても、まったく知的反応が起こりませんが、“鳩”が pigeon、“鶴”が crane と漢字で教えると、はじめて見る“鷹、鷲”といった漢字にも知的反応が起こり、鷹が hawk であり、鷲が eagle であることを教えられればすぐに覚えられる、ということが確かめられています。

つまり、四つの漢字に共通する“鳥”という部首から、未習の“鷹、鷲”も「鳥の仲間ではないか？」という推理や分析の力が自然に芽生えるのは、日本語を母国語としない子どもたちでも、まったく同じなのです。

そして、漢字で母国語を学んだ子どもたちの中から、多くの優秀な人材が育ち、その国の発展の原動力となれば、世界中の人々が漢字に注目するようになるに違いありません。

そうした状況の中で、英米人やドイツ人、フランス人、そして世界のいたるところで「自分の国の言葉を漢字で読んでみよう」あるいは「子どもに漢字で母国語を学ばせて

みよう」という人が次第に増え、さらには「漢字を国際文字に」という声が、世界のあちらこちらから上がるようになったら、どんなに素晴らしいことでしょうか。

私たちが、どんなに英会話に熟達しても、それだけでは決して英米人を深く理解することはできません。その逆に、英米人が日本語を流暢りゅうちように話せるようになった場合も、また然りです。

ところが、世界中の人々が漢字を自分たちの言葉で読めるようになれば、世界中の人々<sup>の</sup>人々<sup>が</sup>が書いた漢字の文章の意味が、(たとえ外国語がわからなくても)誰にでも理解できるようになるわけです。

世界中の人々が、お互いに相手を深く理解しない限り、誤解が生じ、紛争が絶えないと思います。世界の平和は、すべての民族がお互いに深く理解し合えて、はじめて可能です。

現在のように、お互いを深く理解する手段をもたない限り、いくら口で平和を唱えても平和は得られません。

しかし、漢字の国際化が実現すれば、世界中の人々<sup>が</sup>もつとお互いを深く理解し合うことができるようになり、無用の誤解や悲惨な流血も避けられるはずです。世界中に、漢字という“種”を蒔き、世界中に平和という“花”を咲かせる——これが私の大きな夢であり、願いでもあるのです。